令和７年度　第２回　川崎市岡本太郎美術館部会　会議録

■日時　　令和８年３月３日（火）１４:００～１６:２０
■場所　　川崎市岡本太郎美術館　創作アトリエ
■出席者
　委員　　加藤弘子、杉浦幸子、橋本善八（部会長）、長門佐季（オンライン）、藤嶋俊會
　事務局　佐藤（副館長）、佐藤、片岡、重森、石原、五十嵐、喜多、加藤、澁谷、千村、鈴木、小山（指定管理者）、山内（指定管理者）
■傍聴者　０名
■議事
・令和８年度　事業経過及び報告
１　展覧会事業
２　資料収集・整理、調査研究
３　作品の保存・修復、貸出
４　普及企画
５　広報活動
６　施設・設備の整備
７　その他
・令和８年度事業予定
・令和７年度事業評価
・その他
■議事録
〇開会

【配布資料確認】

【会議公開・議事録作成に関する説明】
事務局より全委員の半数以上である５名出席により、会議の成立を報告。
傍聴希望があった場合、公開とする旨を確認。

【橋本部会長挨拶】

【事務局より議題１（展覧会事業）について説明】
橋本部会長：　企画展事業と常設展の事業について説明があったが、展覧会には大変多くの来館者があるようであり、年齢層も幅広くすごい数字であると感じた。
藤嶋委員：　昨年の展覧会は本当に大きな展覧会であった。大阪万博を受けての万博、また、バトルといってもよい組み合わせの原爆と芸術という２つのテーマがすごかったと思う。しかもいろいろな反響を呼んでいるという点が印象的である。

やはりこれは太郎さんだからだなと感じる。岡本太郎という存在は懐が深く、何でも受け入れる。これは常設展の遊びという内容とも関わってくるのであるが、太郎さんの真面目なところがものすごく現れているとも感じる。青春時代から、多分そうだったのだろうと思うが、真面目さがありつつ、万博では太陽の塔をつくり、それが後世に認められてしまう。あれもまさに遊びである。祭りだとか、踊りだとか、色んな民俗資料からその内容を読み解いていくという、太郎さんの懐の深さを感じる。また、原爆と芸術展はすごく重く、シリアスなテーマで私自身は、原爆の絵のコーナーはまともに見れないという感じがした。若者が体験者の話を聞きながらそのままストレートに絵にするというのは、両者にとって大変であっただろうと思う。そうやって繋いでいかないといけないのかなという感じがしたし、いろんなことを感じた展覧会であった。２つの大きい展覧会を皆さんでつくり、しかもそれに、教育プログラムを合わせて一緒にやっていくというのは、なかなか、簡単なことではないと思う。

杉浦委員：　今、美術館や博物館というものが社会において本当に必要なのかという問いを突きつけられ続けていると感じている。私は美大で学芸員の養成を担う学科に所属している。日本も含め世界のミュージアムが今どういう状況にあるのかということを、日々リサーチしていている。ICOM の倫理規定を見直すという流れや、その日本語訳を行う動きも出ており、美術館は大きな変化の中にあると感じている。一方で来館者というミクロの視点で見ると、この美術館は、バブルがはじけた後の１９９９年に開館して、立地的に来館するのも大変ではという懸念もあったであろう中、ずっと活動を続けてこられている。本日も展覧会を拝見したが、天気が悪いにもかかわらず幅広い年代の方たちが来館されている。今年は企画展をすべて拝見したが、今年の岡本太郎現代芸術賞については特異的なポイントが際立っていると、強く感じた。炭鉱のカナリアではないが、芸術表現を志す人たちは、どこかわからないところでアンテナが立っている。もうあと一歩踏み出したら息絶えるカナリアの様に最前線で生きているような雰囲気が感じられた。最近では、五美大展について三潴氏が X で「ゴミ大展」と投稿し、それが炎上するというようなことがあったが、片やゴミのように見えるかもしれないが、片やそれが現実を映し出す、今、生きてる老若男女の作家たちの表現としてある。それがゴミだとしたらゴミである意味もあると思う。拝見した TARO 賞の作家たちも、やむにやまれぬ表現みたいなものがあった。そのように考えると、審査員による選抜では選ばれなかった入選者の３０倍ぐらいになる人たちのプランにも興味が沸く。選抜というのはどうしても審査員の評価が入ってくる。もちろん、審査員の視点はとても重要で、今日も展示で体感させていただいたところだが、そこからこぼれ落ちてしまった方たちの思いや表現も知りたいし、感じ取りたいと思う。それは基町高

校の子達の表現を見てきたから余計にそのように思うのかもしれない。学校教育の中で生み出されてきた、作品はほぼ美術館で展示されることはない。基町高校の生徒たちの作品展示は、コントラバーシャルであり軽く扱えるものでもなく、批判や炎上するというリスクがあるところを、今回の展覧会では、強い姿勢を持ちつつしなやかに、展示に落とし込んでおり、また、作家のトークについても丁寧に行っていた。原爆展でもトークの場面を拝見したが、たくさんの方たちが会場に来ていて、来場者が作家のリアルな声を聞きたがっている。そういったところが岡本太郎美術館の存在意義だということを改めて感じた一年であった。世界の状況が現れているのが TARO 賞の展示であると思った。

加藤委員：　皆さんのお話にもあったように今年度最も強く感じたのは、非常に展示のテーマや内容がタイムリーであったという点である。その時々の状況に応じて、非常に社会的な問題に切り込んでいき、そしてあるときには巧みに収益に結び付けていくというタイミングの良さというものが、この美術館の動き方にはあるということを改めて感じた。それが単に収益のためであったり、派手さを狙った展示内容ということではなく、きちんと本質を踏まえ、深いところで共感をさせるような内容であったことが本当に素晴らしかったと思う。

資料では、展覧会の収支がよく読み取りにくい。入館料だけで運営を賄える美術館はないのだが、岡本太郎美術館には入館料以外の外部資金等の、経費を支えている要素はあるのか。

事務局：　補助金は今年度は取れていない。ふるさと納税については、文化芸術に関するものに寄附することは出来るようにはなっている。美術館の経費は毎年予算要求しその中でやりくりをしている。

加藤委員：　なぜそこが気になったのかというと、休館をすると予算規模が小さくなることが多い。再度開館した際に市の財政状況が悪くなっていた場合、予算規模をきちんと今と同レベルに戻せるかという不安がある。そういう事を考えると、美術館が今やっていることの意味・意義をきちんと市に理解をしてもらいたい。この美術館は川崎市のためだけでなく、国内もしくは海外に対しても非常にアピールを出来る場所であり、市の財産であるということをどのようにしたら伝えられるのかを考える必要がある。

長門委員：　今回は万博と原爆という、２つの大きな歴史的事象を扱う展覧会であり、そこに岡本太郎という焦点もあった。趣旨にも述べられていたように、歴史的な過去を取り上げる際、どのようにして過去と現在をうまくつなぐかということが、常に大きな課題であると日頃から感じている。

岡本太郎という人の持つ力やパワーが軸となりつつも、現在の作家を巻き込んで、単に若い人たちに「こうした過去があった」と伝えるだけでなく、アーティストの視点も含めて現在の視点から、過去を現在につなげていくということをしている。また、同時にそれを今の問題として捉

え「美術」をその中で考えるというとても良い機会が作られているという様に感じた。

55 年前の万博では、美術は多くの要素と絡み合ったりしたということがあり、戦争中においても、「美術が本当に必要か」ということを考えさせられた。世界が不安定な状況にある今、美術館や美術の役割を考える中で、そうした過去に立ち返りつつ、先ほどのお話にもあったように美術館が変わる時期ではあるが、現在においても美術が平和にとって必要であるということを子どもたちにも理解してもらいたいと考えている。その点でも、若い人たちに向けて SNS を活用した効果的な発信によって多くの来館者を得られたことは、非常に良い成果であったと思う。また、これまでの常設展での積み重ねや、太郎に対する研究、スタッフそれぞれの視点が企画に反映されており、今回は過去の太陽の塔の展覧会とは、また異なる視点が積み重ねられていたと思う。25 年間の積み重ねが、新たな太陽の塔の紹介につながっているのであり、その蓄積こそが重要であると感じた。

常設展に海外の方も来館されていたという事であったが、日ごろどれぐらいの割合で来館しているか。

事務局：　最近は、日平均で 500 人ぐらいの来館者があるが外国人は多くて 10 人ぐらい。

長門委員：　海外から観光客を呼び込もうという話が、国からも出ているところだが、海外からの方が、日本に来て、当館（神奈川県立近代美術館）を含めて地方の美術館に足を運ぶということはなかなか少ないと思う。発信の仕方に課題があるかと反省しているところではあるが、とはいえ、これから世界に岡本太郎がどんどん発信されていくと思うと、海外からの客も増えてくるのではないかと期待している。

さまざまな活動をしてきて入館者数も増えてきているという状況の中で、改修工事に入るということだが、この現状を改修後につなげていくというのは、かなり大変なことだと思う。

次は、休室中のことについても、お聞かせいただければと思う。

橋本部会長：　岡本太郎さんという個人名を冠した美術館で、企画のバリエーションを作っていくのは、とても大変であると思う。当館（世田谷美術館）にも分館が３つあり、それぞれに個人名がついていて、大いに苦労している。例えるなら、同じ材料で毎回料理を作らなければならないようなものであり、その点で多くの工夫をされているのだと思う。

原爆展で、基町高校の生徒たちが取り組んだことは、人と人が直接会って取材を行うというものであり、そこから子どもたちは深い体験を質量ともに得ていて、それは今後の人生に大いに役立つであろうと思う。この美術館が、美術を媒介としながら、単に「何かを描けるようになる」以上に、子どもたちが人間としての大切な物差しを身につけられるような教育普及活動を展開できればよいと思う。

広島の新聞記者の方が、随分前に『チンチン電車と女子学生』という本を出している。今でも広島の街には路面電車が多く走っているが、戦争中は男性の運転手が兵隊に駆り出されていなくなり、地域の複数の女学校の生徒が運転台に立って運転をしていた。
そして8月6日の朝、市電が走っているところに原爆が落ちた。
しかし、その当時の記録は、現在の広電にもほとんど残っていない。
その本の著者は、多くの人に会い、さまざまな場所を調べ、当時何が起きていたかを丹念にたどっている。それは実に優れた著作であり、今でも8月になると読み返している。人として繰り返してはならないことを、再び起こさないために、そして大きな平和な世界を築くために、岡本太郎を軸としながら、この美術館が何か展開できることがあればよいと思う。時間とともに記憶や記録、資料の意味は薄れてしまうおそれがあるが、それを再生していくのが岡本太郎であり、あるいは様々なアートの力であると思っている。
TARO 賞は 29 回を迎えているが、何回までいったら何かしようというような考えはあるのか。

事務局：　休室中は展示ができないので3年間は開催がなく、リニューアル後に第30回を開催する予定。

橋本部会長：　回数を重ねても、新しい人が応募してくれて、たくさんの人が興味を持ち、良い作品が選ばれるということは良いことである。しかし、主催している側にとってルーティンになってくると、モチベーションの保ち方が難しくなってくる。現在もされていると思うが、受賞者の皆さんの追跡や、作家の活用について考えていくことも良いことであると思う。

事務局：　今年、新しい試みであったのは、ゲスト審査員として福田美蘭さんに入っていただいたことである。女性の審査員が入るというのも新しい試みであり、新しい風が入ることで議論は活性化し、良い雰囲気であったと思う。

橋本部会長：　特にアーティストの審査員というのは、大きなポイントであったと思う。今は、特別に年齢や男女といったことに言及しなくても、審査員が世代交代やジェンダーバランスを考えることで、公募展はさらに活性化するだろうという感触を持っている。

【事務局より議題２（資料収集・整理、調査研究）から議題７（その他）について一括して説明】

藤嶋委員：　TARO 賞ではマンネリ化していると感じるものが少しあったように思う。教育プログラムの中でバスの予約が出来ないということがあったが、大変なことだと思う。
出張展とはどういうものか。

事務局：　来年度は小規模ではあるが館内展示もしているので、学校受け入れを続行する予定である。そのため、出張展と館内での受け入れとを並行して行うことになるので、出張展を積極的に増やすことは難しいと考えている。ただ、今年度に試験的に実施した学校に行き、出張美術館の様な展示をしたり、出張授業の受け入れ校数を増やしていきたいと思っている。

杉浦委員：　展覧会の方はアンケートを拝見し来館者の声を聞けている。教育プログラムの方はアンケートを取っていないのか。

事務局：　毎回アンケートは取っているが件数が多く資料に載せきれていない。

杉浦委員：　うまく整理して見せていただきたい。何をやって、その後に何が生まれたかという PDCA の C にあたり、私たちが評価をするために、行った内容はもちろんのこと、プログラムの対象となった人がそれをどう受けてめて、どう消化したのかということを知る必要があり、それによって有益な意見が出せる。プログラムを実施していることは問題ないので、それが参加者にどう受け止められているかが知りたい。例えば、裏探検ツアーは小学生と中学生を別々に受け入れているが、中学生の方が参加人数が少ない。普通にデータだけ見るともったいないと思うが、参加者は質的には良かったと思っているかもしれない。
教育プログラムの広報はどのように行っているか。

事務局：　イベントごとの広報については基本的にはチラシを作っている。他の美術館にはあまり送付できてはいないが、生田緑地周辺や館内で掲示や配布をしたり、影響の大きいところだとホームページと SNS で発信をしている。人気のあるイベントについてはホームページや SNS で発信するとすぐに定員になるが、裏探検ツアーについては、小学生の部はすぐに枠が埋まったが、中学生の部については、あまり美術館に来館しない年代ということもあって、定員には至らなかった。

杉浦委員：　裏探検ツアーや「キャリア検索」については X では広報して、それでも集まらない状況なのか。

事務局：　X でも広報している。キャリア検索については定員となっている。

杉浦委員：　キャリア検索は 5 名が定員ということか。

事務局：　はい。今回は初回でもあり、大人数に対応できないということで定員を 5 名とした。普段受け入れている高校生のインターンシップについても 3 人から 5 人くらいの規模で行っておりそれに準じた規模で行った。

杉浦委員：　今後、休室中にそのあたりをブラッシュアップする可能性があるとすれば、もう少し枠を広げられてもいいのではと思う。赤ちゃん向けのイベントを 4 歳から未就学に広げたのはとても良い。また、赤ちゃんのプログラムを定期的に行っているということも良いと思う。このプログラムでさらに対象を高校生まで広げていて、岡本太郎美術館は、若い人たちが将来的にアートへと繋がりやすいきっかけを作る美術館であると思っている。SNS は、やり方によって面白い可能性があるのではないかと考えている。また、参加した人たちに意見を聞くことで、重要な情報をく

れることもある。それをさらに私たちに伝えてもらえると、質的な部分まで突っ込んだ、役に立つ意見が言えるようになるのではと思う。
広報については、視点を定めて重点的に広報しているというところがとても良いと思った。
ワークショップは有料と無料なものがあるが、雑談型アート鑑賞は1,000円となっているがなぜこの額になったのか。

事務局：　陶土を使っているということと、実際に作品を触りその後制作に入るという3時間の長いプログラムであるため、準備の時間と厚いスタッフ体制が必要ということで今回の金額の設定になっている。

杉浦委員：　資料にあるワークショップは無料のものが多いが、有料にしてもよいものもあるのではないかと思う。確かに社会教育施設なので、できるだけ無料でという考え方もあると思うが、バッジ1つでも何かしらお金がかかる。ものや体験を大切にするという気持ちを育てるという意味でも、少し料金体系を見直してもよいのではないかと思う。海外の美術館でも、かなりの料金を取っているところもある。そのあたりについても、休館中にリサーチを行い、正しい形で収入が得られるような仕組みを作っていくことも出来るのではないか。

長門委員：　本当に限られた人数でこれだけの普及教育プログラムをされていてすごいと思うし、その努力がうかがえる。
先ほども指摘があったが、定員が決まっているものについては報告書に記載した方が分かりやすい。
イベントによっては、少数の方が良いものもあれば、広く短時間で開催する方が良いものもあるが、岡本太郎美術館では、強弱やバリエーション、また赤ちゃん・大人・高齢向けなど様々な年齢層が参加できるものを組み合わせて展開されている。普及活動と広報活動は一体化していてどんな内容で、どんな人をターゲットにして普及プログラムを作り、どこにどう発信するかということはセットであり重要なところだと思う。その部分をどうしたのかが見えると良いと思う。
小学生くらいまでは親と一緒にイベントに来ることが多いが、高校生になるとなかなか来館しない。当館（神奈川県立近代美術館）でも高校生にどうやって来てもらうかを高校生と考えるという場を作ったことがあるが、今の高校生がどうやって情報を得て、どう動くのかということも含めて「学生限定　青春×芸術デー」の成果として意見が聞こえてくるといいと思った。

加藤委員：　生誕祭115の各プログラムの人数が入っていないのはなぜか。

事務局：　資料の作成が間に合わなかった。

加藤委員：　ワークショップは参加したくても、定員いっぱいで参加出来なかったという方が結構いるのではないかということが気になっている。それは岡本太郎美術館だけの問題ではなく、公立館の立場で考える場合にはどうしても安全性の確保等からも受け入れ人数を絞らざるをえない状況が

色々ある。ただ、行きたいのに行けない人がいたら申し訳ないという気持ちがある。生誕祭 115 のように来た人が誰でも気軽に参加出来るワークショップはそういった需要にも答えられるではないかという思いがありどれくらい人気だったのかというのが気になった。
ワークショップ参加者のアンケート結果については、自分も拝見したいと思う。誰が来てもすぐできるワークショップを開催した場合、初めて来る方がかなりいるのではないかと考えられ、美術館のことを周知するうえで有効であったのではないかと思われる。そういった点も含めてワークショップの成果として提示しても良いと思う。また、ワークショップを行ってそこから何が成果として得られたかについてもう少し明確に美術館として意識することで、次に何をするべきかが見えてくると思う。
今日、美術館までのタクシーの中で運転手から、「最近、美術館が閉まるので駆け込みでくるお客さんをよく乗せる」という話を聞いた。広報の説明を聞いて、これは単に新聞記事に掲載されたからというだけはなく、意図的に情報を流し、どれくらい来館があるのかを意識しながら広報をしている成果だということが分かり、改めて広報活動についてすごいと思った。

橋本部会長：　SNS の展開も一昨年ぐらいと比べると大きく進展しているように思う。SNS のインスタ等では、出だしの３秒で受け取り側がそこに止まるか止まらないかが決まる。画像をどれぐらい美しく撮るかは大切。また、１コマずつが３秒か４秒で変わっていかないと今の人たちは見てくれない。若い人たちや子育て世代は非常に時間的なものにせっつかれて生きていて情報をつまみ食いしている感じがあるので、その辺を認識されて作られても良いと思う。
今の作品の所蔵件数はどのくらいか。

事務局：　寄贈の点数は 1,799 点としているが、その後の点数については、数え方によって変わるところもあり所蔵数は正式には出していない。

橋本部会長：　収蔵スペースには余裕はあるのか。

事務局：　そもそも最初に寄贈された作品が収蔵庫に収まらないというところから始まっており、大きいものは新規ではほとんど購入しておらず、収集は資料的なものが多い。

橋本部会長：　その辺を今度の改修工事で解消される予定があるか。

事務局：　その予定はない。

橋本部会長：　飽和状態は良くない。今は事情がわかっている職員が対応しているからなんとかやっていると思うが、20 年 30 年後に代替わりをしたときを考えると早めに対応したほうが良い。
購入の予算について説明があったが、予算立ては川崎市の局が単年度で立てているのか。基金化はしているのか。

事務局：　市民文化局で立てており、基金化はしていない。

加藤委員：　平塚美術館では、作品購入予算がなく寄附等を集めることで予算を作るため、また、展覧会の予算も十分ではないのでそれらを補うために基金を活用する仕組みを作った。これまでは寄附があってもその年度に使わなくてはならなかったが、貯めておけるようになり、少額の寄附でもある程度まとまってから使えるようになった。行政では寄附は雑収入になってしまうが美術館あてに入れてもらえるようになった。

橋本委員：　作品の安全な管理と適正な取得方法を確立することが先々大事になってくる。

事務局：　今回の改修工事に併せて収蔵庫を改修するということは学芸側としては希望しているところではあるが予算取りが厳しいという状況である。

加藤委員：　どこの美術館でも抱える問題ではあるが、一番すぐに解決できるのは外部倉庫の借り上げだと思われる。そうした対応も視野に入れて考え始めても良いのではないか。休室中に作品を外部に出すようなので、それをきっかけに、休館中に外部倉庫の利用について今後どう考えるのかを検討するのは良いタイミングではないかと思う。収蔵庫を作るより外部倉庫を利用する方が現実的だろう。作品を良いコンディションで保管して次の世代に伝えるということは重要であり、飽和状態だからといって購入予算を止めるという考えになるのは、美術館を展開していくうえでマイナスであり、採用すべきでない方法だと思う。

橋本部会長：　小学校や中学校の来館については、美術館と教育委員会の連携がありそのうえで行われている事業なのか、それとも学校単位のものなのか。

事務局：　学校単位である。教育研究会や種々の研修会でのネットワークはあるが、申し込みについては教育委員会経由ではなく、学校単位となっている。また、川崎市だけでなく近隣の横浜市・大和市・狛江市等いろんなところから来館していただいている。

橋本部会長：　川崎市内だとバス代が出る学校と出ない学校があるのでは。

事務局：　バス代は保護者負担になっている。

橋本部会長：　全般的に適正に美術館運営をされていると理解している。

【事務局より令和８年度事業予定および事業評価について説明】

橋本委員：　改修工事という特殊な状況での事業にはなるが、何かお互いに連携できることがあればと思う。３年間という長い期間であるため、広報を通じて継続的につながりを保ち、忘れられないようにしていく必要がある。

杉浦委員：　休室中の３年間にどのように活動を行うか、再開後にどのような活動を行うのか、についてのビジョンやイメージについて、今後聞くことが出来たらいいと思う。

〇閉会